

大学教育の質の向上に係わる課題 教養教育の望ましい姿を求めて

大好直

はじめに

教育改善のために指導技術を尊重しなければ、活動として良い成果をあげることは難しいが、しかし、教育改善の方向が正しいと教育担当者が納得できなければ、改善のためのエネルギーは湧かないだろうし、持続的な改善も難しいだろう。すなわち、教養教育の基本的な考え方が明確で、教育に熱意と信念がなければならぬだろう。そのような状況を形成する原動力は、それぞれが教育の在り方を自問し、正しいと思われる答を、継続的に探求する姿勢であろう。そこで、検討の余地や批判もあるかもしれないが、大学教育の質の向上を考えるための基本的な課題として、教養教育の望ましい姿とはどのようなものなのかを考えてみたい。その結論をここに示すことは出来ないが、本稿が、教養教育に携わる関係者にとって、更に議論を深める契機となれば幸いである。

評価は人がするもの

「学士課程における教育はどう在るべきか」という課題がある⁽¹⁾。それぞれに異なる歴史を持つ大学であれば、必然的にその考え方が少しずつ異なるが、政府指導のもと創設されてきた国立大学で行おうとしている教育内容は、それぞれに表現が異なるものの、ほとんど違いがない。一時期、一般教育の教育効果が疑問視され、設置基準の大綱化のトリガーともなったが、大綱化後のいろいろな改革を経て、現在では、学士課程における教養教育の重要性が、再認識される様になった。それでは改革等によって、以前の一般教育から現行の教養教育へ様変わりしたかと問えば、表現や仕組みは異なっても、その本質である教育理念や目的は、ほとんど変わっていないと言って良い。では、なぜこのように一般世間で大学教育に対する

評価が変わったのであろうか。確かに、問題解決型授業の導入や学生参加型授業の導入など、指導技術上の改善による違いが見られるが、もっと本質的な要因は、教育内容により評価が変わったのではなく、評価する人の心の中で、時流に乗る意見と乗らない意見の重みが入れ替わったと言いきださる。テロ事件や殺人事件の発生による恐怖、そして高度技術社会における脆弱性の発覚などにより、教育に対する人の考え方や立場が変わったためであろう。ここに評価というものは相対的なものという本性が見える。

評価対象となった教育の本質がほとんど変わっていないとしても、評価者は人であり、その考え方は経験した事柄に強く影響をうけるはずである。時代背景、価値観、経済環境、文化慣習等が異なれば、人の評価判断も異なるだろう。そこで、大学教育の質の向上を議論する際に、必ずしも絶対的ではない評価結果に対し、どのように解釈したらよいか、どういう意味を持つものかを、多少、距離を置いて考える余裕が必要である。評価が形式に流れ、木を見て森を見ない状態になるのを懼れる。

評価の規模は、教育現場の身近な学生指導に始まって国家的教育体制の理念まで様々なレベルが想定でき、また数分で済んでしまう評価から数世代にわたる評価まで色々な時間的スパンが想定できる。いずれの規模に対しても評価目的に応じて、適切な手段方法を考えなければならない。このとき、大切なことは、時流に合致した教育が良いとして評価するのか、あるいは時流に左右されない教育が良いとして評価するのか、選択判断が必要である。評価の際に、時代背景を配慮しない非現実的な評価はありえないし、また、基本的なところで人間の価値が否定される評価もありえない。

したがって、評価に先立って、時代を超えて不変であるべき事柄と、時代状況に応じて変えて行くべき事柄を、見分ける眼力が問われるだろう。

新しい時代における教養教育

中央教育審議会において「新しい時代における教養教育の在り方について」という答申（平成14年2月21日）がなされている⁽²⁾。その答申には非常に凝縮した内容が盛り込まれているので、教養基礎教育を担当する者であれば、現在、教養としてどのような点が要求されているかを理解する上で大変便利である。それによれば、便利さと豊かさに恵まれ、価値観の多様化・相対化した現代社会のなかでは、教養教育として実践する方法や考え方も、その変化に対応しなければならないとしている。すなわち、残念ながら、多様化の中で、哲学、思想、科学、文学、芸術をはじめ、教養として薦められるべき学問の体系性が軽視されるばかりでなく、断片的な知識情報の偏重、効率優先、精神の豊かさの軽視など、ネガティブな状況が現れてきたとの認識があり、是正しなければならないと指摘している。そこで新しい時代に求められる教養の要素として次の5点を重視するとしている。

- ① 社会とのかかわりの中で自己を位置付け、律していく力、向上心や志を持って生き、より新しい時代の創造に向かって行動する力
- ② 我が国の伝統や文化、歴史等に対する理解を深めるとともに、異文化やその背景にある宗教を理解する資質・態度
- ③ 科学技術の著しい発展や情報化の進展に対応し、論理的に対処する能力や、これらのもたらす功罪両面についての正確な理解力、判断力
- ④ 日常生活を営むための言語技術、論理的思考力や表現力の根源、日本人としてのアイデンティティ、豊かな情緒や感性、すべての知的活動の基盤としての国語力
- ⑤ 礼儀・作法など型から入り、身体感覚として身に付けられる「修養的教養」

もちろん教養は生涯に渡って培うことであり、かならずしも大学だけがその場であるということではないが、大学教育に求める期待は大きく、グ

ローバル化や科学技術の進展など社会の激しい変化に対応し得る統合された知の基盤を学生時代に培うことを目指し、教養教育の再構築にとりくむことが必要としている。更に、国内外でのボランティア活動、インターンシップなどの職業体験、留学や長期旅行などを通じて得られる教養も重要とし、「寄り道」の意義も積極的に評価すべきとしている。大学における教養教育の施策として考えられる例として4点を挙げれば

- ① 改革や指導方法の改善により「感銘と感動を与え知的好奇心を喚起する授業」を生み出す。
- ② 大学や教員の積極的な取り組みを促す仕組みを整備する。
- ③ 教養教育の責任ある実施体制を確立する。
- ④ 学生の社会や異文化との交流を促進する。

このように審議会の答申は、現状に立脚して、国民のための教育方針としてまとめたもので、当然のことながら、社会の変化をかなり配慮したものになっている。教養教育の施策の例としてあげたこの4点に基づいて検討すれば、秋田大学の教養基礎教育では、以前から色々な形で意識的に取り組んできているところであるが、ほぼ達成できている面もあれば未だ不十分な面もある。詳細は2年ごとに発刊している教養基礎教育自己点検・評価報告書を参照されたい。

教養教育の理念を求めて

意識の高い教官にとっては今更と思われるかもしれないが、教養教育のミッションを、より明確にしたいと考えている教官は、結構多いのではないだろうか。FDのためのシンポジウムや授業改善のためのアンケートなどを計画する際に、教養教育のミッションは何かが問われるようである。教養教育科目を担当する教官は、その科目に特化した授業の目的を持っているはずなので、シラバスから窺えるように様々な創意工夫が凝らされており、それはそれで良いと考える。しかし全学的教育活動として効果を上げるためには、基軸となる共通の目的を周知しておく必要がある。教養基礎教育では次のように謳っている⁽³⁾。

「特定の専門に偏ることなく、幅広い領域に学問的関心を持ち、社会の変化や多様性に自律的かつ柔軟に対応できる素養を身に

付けるとともに、専門の内容をより深く理解するために基礎となる能力を習得する」

これは、先進的取り組みをしていると評されるいくつかの私立大学と比較すれば、「何でもあり」の教養教育であるという評を受けない訳ではないが、逆に、これこそ国立大学の力であるとも言える。先の中央審議会答申の内容からも理解できるように、一昔前に教養教育の中心となっていた履修科目の体系だけでは不十分なのである。科学技術立国を目指す中で将来を生きる若人には、従来の教養に加えて、例えば、専門としない学生であっても「科学技術言語リテラシーの修得」などが必要である。近い将来に先進科学の実現や更なる高度情報社会の到来を考えれば、新しい時代の教養教育として、それらを反映した組織体系が必要なのである。秋田大学の教養基礎教育の組織は、教養教育科目のみならず基礎教育科目も含む学士課程教育の重要な部分を担当しており、特に教養教育科目の主要部の一つに目的・主題別科目群を組み込んで、新しい組織体系として構成されている。それらの科目群は専門教育では補うことの出来ない内容を提供し、視野の広い教育を確保する役割を果たしている。

学士課程の教育に関わる教官であれば、一貫した大学教育を実践する中で、専門教育との調和を考えることが重要であるとともに、多様化した現代社会で活躍できる卒業生を送り出すことを心得ておかなければならないが、同時に、本来の古典的教養理念による「考え方」も心得ておかなければならないだろう。時代を超えて受け入れられる「考え方」については、その歴史がヒントを与えてくれる。

歴史が教える教養

教養の理念を、原理的な問題として哲学的側面から論じた報告⁴⁾がある。めまぐるしく変わる世相を抜きにしても、一応完結している論理であり参考になる。その報告は、一種のエリート市民への教育とも言える性格が潜む古代ギリシャの教養概念「パイディア」に始まり、引き続き教育思想の歴史的概観を述べた後、アリストテレスの「思慮の理論」を解説している。そこで重要な点は、教養教育の目的とする思慮ある人とは「徳のある人であり、よき目的を欲し、他者のことを理解し、

気配りをし、その良き目的への最善の手段を現実から見て取ることの出来る実践的判断力を備えた人」であると紹介している点である。我々は、教養というものの輪郭を理解し、日常の教養教育に係わる立場を説明するために、議論の拠り所となるものを探しているが、このような表現は、その根拠を得る上で参考になる。知識は必要であるが、良い行為に向かう思慮を培うためには、経験や修行が必要であるとしている。西洋の教養の伝統の中に、単に知識を身に付けるということではなく、身に付けた知識を正しく活かす力としての「思慮の思想」があったということである。現代に当てはめれば、専門の深さが要求されるとともに、思慮の深さも身に付けなければならないということであり、合点がいくものである。

おわりに

教育の改善は、様々な角度から同時に行われねば、なかなか成果があがらない。前述のような教育方針や姿勢に関する改善の他に、技術的なことも沢山ある。たとえば、授業現場における教官の学生を引き付ける魅力的パフォーマンスも重要であり、授業に入る前のシラバス設計や教材作成等も重要である。このように色々な段階で、個人による改善努力も必要である。これらの改善は、通常の点検評価を通して可能であり、そう難しいことではない。しかし組織的に配慮しなければならぬ点として、時勢に応じた教育体制の実現を容易にするため、組織の柔軟性を、予め確保しておくことが重要である。具体的には色々な方法が考えられるが、たとえば教育を担当するグループ単位を、教官所属単位に限定せず教科担当単位の編成を進めるということである。教育分野の学際化や社会の多様化に伴う非専門分野の教育必要性を考えると、授業でカバーすべき分野の変更も迫られることになるだろう。限られた在学年数での指導となれば、急にカリキュラム編成を変更することには無理が生ずる。教育方法として全てを否定するものではないが、自由度が高いとされるオムニバス形式の講義が増えれば、つまみ食いの学習となり、学問的体系性が希薄になる虞もある。

時代を超えても不変であるべき教育と、社会が変われば変えるべき教育があることを、先に述べたが、たとえば倫理観を例にとれば、日本の倫理

観はほぼ30年毎に変化しているという⁶⁾。いま通用する倫理観が将来にわたって、人間社会に受け入れられていくかどうか不透明であるという。座標軸が不透明の中で、教育の質の向上を目指すためには、常に課題意識を持って研究調査し、現時点で最善と思われる教育を、信念を持って実践しなければならない。教育改善は時代の推移とともにあり、常に最善策も変化するものと考えられる。したがって教育改善活動は永久に続けなければならない宿命を持っている。

参考資料

- (1) 一般教育学会編 大学教育研究の課題，改革動向への批判と提言，玉川大学出版部，(1997)
- (2) 中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」(2002)，
http://www.mext.go.jp/b__menu/shingi/
- (3) 秋田大学教養基礎教育フォーラムのホームページ (2002)，<http://www.akita-u.ac.jp/>
- (4) 樋口善郎，教養の理念をめぐって，京都大学哲学研究室 Prospectus No.1 (1998)
- (5) 武田邦彦，土屋敏明，時代倫理と工学教育，工学教育，51巻1号78-83頁，(2003)